読んでみました

『満州　集団自決』

新海　均　著（河出書房新社）

石飛　仁（会員・記録作家）

満州国の崩壊を、27万人、一一〇二団（隊）といわれた満蒙開拓団（青少年義勇隊）入植者の集団自決という事実に絞って追跡描写した力作である。

中でも王道楽土・五族協和の夢の開拓団として、経済的成功を治めていた「満州瑞穂開拓団（本土の青森から鹿児島までの22県から参加した）」の入植事情からその瓦解までの全過程を克明に描き、政府と関東軍が共同して描いた「満州産業開発五カ年計画」に踊った末端の実施者たちが、国家幻想から切り捨てられたことを知って集団自決して果てていく姿を見事に捉えている。

国家挙げての開拓イデオロギーが団員一人ひとりを包み込んで熱狂の渡満を演出していくその経過をも丁寧に描いている。

特に私が感心した点があった。戦争を発動していた国家の作為がくっきりと見えてくる箇所があったのだ。それは、第四章（ソ連参戦で相次ぐ〝虐殺と集団自決〟）の中にあった。「日本政府は8月14日外務大臣・東郷茂徳の名で満州・中国はじめ各地の大使館、領事館に緊急電信を発した。『参加国宣言受託に関する在外現地機関に対する訓令』である。この訓令の前に『一般方針』として二つの項目がある。それは、一、居留民ハ出来得ル限リ定着ノ方針ヲ執ル二、居留民ノ生命財産ノ保護ニ付テハ万全ノ措置ヲ構ズ」という日本政府の残留定着方針があったことを示した後で、著者はそれを忠実に守って集団自決した来民（くたみ）開拓団のケースも取り上げている点である。

この国策に忠実に従った被差別部落出身者中心の開拓団の悲劇については、すでに高橋幸春が『絶望の移民史―満州に送られた「被差別部落」の記録』（毎日新聞出版）で克明に書いているのだが、ここでも差別反対の激しい糾弾闘争の果てに到達していた苦悩の深部に触れている。

国が掲げる開拓イデオロギーには融和化に賛同して別天地を目指した被差別部落問題の、もう一つの動機があったのだ。この満蒙開拓という日本政府の政策には二束三文で買い叩かれて土地を失った匪賊（抗日ゲリラとも言われていた）たちの怨嗟があり、その上に、五族協和を成り立たせようとした作為があったのだ。国内で行き場を失った被差別部落問題にとって、熱心な勧誘を受けて行ったその「外地」は、夢打ち砕く武装の開拓の地だった。

ソ連が参戦した後の8月17日、吉林省扶餘県五家站に入植していた熊本県の来民開拓団全276名は、2000人以上の中国人に包囲襲撃され、防戦後一つの建物内に終結し、バンザイを叫んで放火し全員が自決して果てた。この最後の模様を伝えるために一人の男が団長の命令を受けて生還し『満ソ殉難記』を書き残していた。もし、彼が生き残っていなければ事実さえなかったことになったであろう。

集団自決という、きわめて日本的な結着のつけ方には、政治的作為があってのことだとしても、その絶叫の底には差別分断と排外主義と搾取と独占と秘密主義が横行し、人権愚弄の社会が重ねられていることを見逃してはなるまい。会員の必読書としてお勧めしたい。